



TITLE:

京大上海センターニュースレター 第56号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第56号. 京大上海センターニュースレター 2005, 56

ISSUE DATE:

2005-05-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/26373>

RIGHT:

日時 7月1日(金)午後2:00-6:00 **会場** 京都大学時計台記念館百周年記念ホール

現代中国の政治経済学(2)

京都大学教授 山本裕美

Ⅲ 現代中国の経済改革に影響を与えた経済学者達

1 薛暮橋 (1904.10.25－)

薛暮橋は中国の官庁エコノミストとも言うべき実務派官僚である。本名は薛与齡と言い、別名は薛雨林、更に筆名は余霖、霖である。彼は大学を出ていない徹底した実務派の経済官僚である。彼は『薛暮橋回顧録』を天津人民出版社から 1996 年に出版している。この本には長命の彼の数々の逸話が述べられており、興味が尽きない。彼の代表作とも言うべき『中国社会主义経済問題研究』は人民出版社から 1979 年に刊行されているが、発行部数は 1000 万部の大ベストセラーとなり、鄧小平の経済改革へ大きな影響を与えた。

この『薛暮橋回顧録』を読んでいる時に思いがけない発見があった。当時の中国青年として薛暮橋は河上肇の著作に親しんでいるのである。彼は 1927 年当時国民党に投獄されていたが、獄中で河上肇の『資本主義経済思想史』を学習したのである。更に『経済学大綱』を 1932 年に学習したのである。また彼は日本語の勉強もしており、上海市内の内山書店に出入りしていた。内山完造が開いた書店は魯迅がしばしば訪れ、上海の左翼作家達のサロンになっていたことは有名である。

薛暮橋が大学を出ていないのになぜ経済学者になれたかと問えば、それは農村経済研究会の存在を抜きにしては語れない。この農村経済研究会においてそれを主宰した人物陳翰笙に師事したからである。陳翰笙 (1887－) は江蘇省無錫出身で本名は陳枢という。彼は 1921 年にシカゴ大学修士を取得、1924 年ベルリン大学東欧史研究所博士となる。博士論文は『帝国主義の弱小民族に対する圧迫』である。同年帰国して北京大学教授となる。1924 年国民党に入党、27 年モスクワの国際農民運動研究所研究員になる。1928 年帰国して中央研究院社会科学研究所所長となった。1935 年中国共産党に入党してモスクワ東方大学研究員となる。その後ワシントン州立大学客員教授、ジョージタウン大学国際問題研究所教授を経て 1951 年帰国し、外交部顧問、国際関係研究所副所長、中国科学院哲学社会科学部委員、中国社会科学院顧問、同世界歴史研究所名誉所長、北京大学教授、中国外交学院兼職教授を歴任する。なお文革中の 1967 年 6 月劉少奇の追随者として批判され失脚して 77 年中国社会科学院顧問として復活している。

ここで薛暮橋の経歴を見てみよう。彼は江蘇省無錫の出身であり、師の陳翰笙と同郷である。1927 年中国共産党入党、国民党に逮捕され、31 年まで 3 年半杭州陸軍監獄に入獄している。1931 年無錫農村経済調査に参加し、31 年中国農村経済研究会を組織して月刊誌『中国農村』を主編で発刊する。この雑誌の主要論文は『《中国農村》論文選』(上下 2 巻)として 1983 年に人民出版社から復刻されている。彼は『薛暮橋回顧録』で師の陳翰笙教授から徹底的に農村調査の方法を叩き込まれ、それが彼の学問的方法論の基礎となっていることを告白している。またなぜ彼が薛暮橋に改名したかは師の陳翰笙による。陳教授が彼を広西師範学校の教員に推薦する時上海労働大学卒として紹介するために改名させたのである。

彼は 1938－42 年には新四軍に参加、43 年山東省政府秘書長兼工商局長となっている。建国後、政務院財政経済委秘書長となり、1951 年国家統計局長となり、54 年国務院国家計画委副主任となり、63 年全国物価委主任となったが、67 年文革により失脚して 75 年に復活し、1980 年国務院経済研究中心総幹事に就任した。

彼の業績は『中国農村経済常識』、『農村経済基本知識』新知書店 1937 年、『思想方法和学习方法』新華書店 1946 年、『中国国民経済的社会主义改造』(蘇星、林子力と共著)人民出版社 1957 年、『社会主义經濟理論問題』人民出版社 1979 年、『中国社会主义經濟問題研

究』1979年である。

2004年に出版された『中国の著名経済学者との対話 第6集』では薛暮橋の章があり、その中で薛暮橋の娘の証言として「父は文革で労働改造所に入れられるまで『資本論』を読んだことはなかった」と証言している。正に実証学派の薛暮橋の面目躍如たるものがある。本人の『回顧録』でも体が衰弱したため五七幹部学校から解放されて北京の自宅に帰った1973年から3年余の時間を使って『資本論』全巻通読したと告白しているのである。

2 杜潤生 (1913.7-)

杜潤生は、趙紫陽(1919.10.17-2005.1.17)時代に党中央農村政策研究室主任として党の1号文件を作成し、農業の経営請負制(「包乾到戸」)を推進したのである。その1号文獻は、1983年の「当面する農村經濟政策の若干の問題」、1984年の「1984年の農村工に関する通知」、1985年の「更にもう一步農村經濟を活性化させる10項目の政策」、1986年の「1986年の農村工作に関する配置」、1987年の「農村改革を深化させよう」に及んでいる。正に農業改革の黄金期にその中心となる農業政策を提唱したのである。

ではなぜ杜潤生はこのような自由主義的農業政策を打ち出すことが出来たのであろうか。それは彼が1950年代に農業部長であった鄧子恢の部下として働いていた経験が生かされていると言って過言ではない。鄧子恢と杜潤生は50年代中期の毛沢東の急進的農業合作化運動を批判した。その批判は以下の如くである。(1) 毛沢東の改革速度が速すぎることに、(2) 土地改革後の一定期間農民の4大自由(商品交換、貸し借り、雇用、小作関係)を認めることに、(3) 多様な合作形式を認めることである。しかしながら、このような批判は逆に毛沢東によって「脚の短い女の歩く道」として批判されてしまったのである。

しかし、この毛沢東の大躍進政策は、1961-63年の大旱魃、經濟政策の失敗、ソ連の援助停止、すなわち天災、人災、外災の「三災」によって失敗に帰した結果、毛沢東は国家主席を辞任した。そして毛沢東の失敗を挽回すべく、劉少奇が国家主席となり、60年代の調整期に入る。この調整期に鄧子恢は杜潤生とともに農業自由化を推進し、個別生産請負制を推進し、更には個別經營請負制を承認するに到ったのである。この政策は毛沢東の文革の反撃で潰されることになる。しかし、後年鄧小平時代に杜潤生はこの経験を生かすことになるのである。

ここで杜潤生の経歴をみてみよう。彼は山西省太谷出身で北京師範大学を卒業している。1935年に12.9運動に参加し、1936年に共産党に入党し、晋魯豫抗日義勇軍第3支隊長、晋冀魯豫辺区政府委員兼教育処長を歴任している。

新中国建国後、彼は党中央中南局秘書長となり、1953年に党中央農村工作部秘書長兼國務院農林弁公室副主任となり、1956年中国科学院秘書長となり、「科学技術12年發展計画」を起草し、1961年には科学憲法と言われる「自然科学研究に関する14条の意見」を起草している。

文革中を迫害されたが、1978年の第11期3中全会以降、国家農業委副主任となり、1983年党中央書記処農村政策研究室主任と國務院農村發展研究センター主任となっている。そして83年から毎年5つの1号文件を起草し、中国農業の市場化を推進したのである。

そして趙紫陽総書記が1989年6月4日の天安門事件で失脚すると同時に杜潤生も失脚したのである。

彼の業績には『中国農村經濟改革』、『中国農村の選択』、『中国農村制度の変遷』、『杜潤生文集』がある。

なお杜潤生の師とも言うべき鄧子恢(1896-1972.12.10)の経歴をみてみよう。彼は福建省龍岩県出身で1926年に共産党に入党し、28年に中華ソビエト共和国臨時中央政府財政人民委員、財政部長になっている。1934年には彼は長征に参加せず残留している。抗日戦争期には新四軍政治部主任を務めており、内戦期には党中央華東局副書記兼華中軍区政

治委員となっている。

新中国建国後、彼は中央人民政府委員、中南軍政委副主任、中南局第 2 書記兼中南軍区第 2 政治委員を歴任し、1951 年農村工作部長、52 年国務院副総理になっている。1955 年と 1962 年に農業集団化を巡り毛沢東と対立、批判されている。1965 年には副総理を解任され、失脚した。文革中は林彪、4 人組により迫害され、病没している。しかし、鄧小平によって 1981 年に名誉復活されている。

彼は土地改革、農業集団化を指導したことで知られているが、青年時代に 1917 年 3 月から 1918 年 5 月まで日本留学しており、早稲田に居住していた。この時代の中国青年として周恩来のように河上肇の著作を通じてマルクス経済学を勉強したことがあるのではなかろうか。彼の伝記には明記されていないが。